

宝くじ おもしろ話

宝くじの発売開始日と「七曜日」とのつながり

事業などを進めるうえで区切りの日の「曜日」を「何曜日にするか」は重要なポイントの1つ。宝くじの場合だと、発売開始日や最終日、それに抽せん日などだが、特に発売開始日は重要だ。

政府が、現在の宝くじの前身「勝札（かちふだ）」を発売したのは昭和20年7月16日。発売最終日は8月15日で、奇しくも、この日に終戦。このため「勝札」は第1回で発売終了。代わって政府は同年10月29日に「第1回宝籤」を発売した。一方、昭和22年10月からは都道府県なども独自の宝くじを発売開始。東京都の場合は「第1回東京都復興宝籤」

を昭和22年3月10日に発売した。

ここで、クイズを1つ。問題は、これらの宝くじの発売開始日は、それぞれ何曜日だったかだ。「73年も前の日の曜日なんて、わかりません」といわれそうだが、正解はすべて「月曜日」だった。

平成時代最後の年となる今年も、73年前の終戦の年と「曜日が同一」。それだけに感慨深いものがある。ちなみに次に同一となるのは11年後だ。

豆知識をもう1つ。宝くじの「発売初日が日曜日」だったことが過去に5回ある。各ブロック宝くじは昭和59年度以降、4月の新年度最初の宝くじを同日に一斉発売に。そして、60年度以降は「曜日に関係なく4月1日に一斉発売」に。その結果、今日までに4月1日が「日曜日」だったのは平成2年、13年、18年、24年、30年の5回。次に4月1日が日曜日となるのは、こちらも11年後だ。



ご当地クーちゃん
茶娘クーちゃん

当せん者エピソード

宝くじ こぼれ話

「売り場の人との出会い」を大切にしたら大当たり

宝くじで幸運に恵まれる「タイミング」があるといわれる。その1つに「売り場の人との出会い」がある。ここに登場の2人の当せん者の場合は…。

兵庫県の会社員Eさん（60）は10年来の宝くじファンだが、購入に際して1つのこだわりがある。それは、売り場前で販売員と自然に目と目が合ったときに買うようにしているそう。

このEさんが昨年のドリームジャンボミニ（第719回全国自治宝くじ）を購入したのは、ドライブへ出かけた途中、スーパーに立ち寄った時だ。店わきに小さな売り場があり、

店前を通った際、販売員とパッチリ、目が合い「よし、買おう」と瞬間的に決心。

結果は、購入した30枚のうちの1枚が1等1億円に当せん。当せん金の用途について「遠い昔にカミさんと約束した世界一周の旅にでも出かけますかねえ」と豪快に笑っていた。

もう1人、大阪府の主婦I子さん（41）だ。彼女の場合は、購入前に販売員の顔を見て「笑顔が素敵で、優しそうで、福顔の人」だったら買うというもの。昨年のドリームジャンボ（第718回全国自治宝くじ）購入の際は、お気に入りの表情の販売員がいる売り場を近所で見つけ、バラで10枚購入。結果は1等の前賞の1億円に当せんした。「自分なりのこだわりを持って買い続ければ、いつか当たると信じています」というI子さんだった。



ご当地クーちゃん
たこ焼きクーちゃん

宝くじ こぼれ話

「夫が導いてくれた当せん」 大喜びする2人の当せん者

みずほ銀行宝くじ部が毎年発表する「宝くじ長者白書」。中に「購入宝くじの保管場所」という項目があり、回答のベスト1は常に「神棚・仏壇」だ。この結果、当せん者にエピソードを聞くと「亡くなった人のおかげ」という人が多い。

10年来の宝くじファンという東京都の主婦K子さん(70)。宝くじを買うといつも仏壇に供え、亡くなったご主人に日々の報告とともに、宝くじの当せんをもお願いするそう。昨年のドリームジャンボミニ(第719回全国自治宝くじ)を10枚購入の時も、宝くじを供えて祈った。そして、抽せん日の翌日に新聞で番号調べをしたら、1等の1億円に当せん。

すぐに息子夫婦とともに墓前にお参りし、当せん報告。換金の窓口で「主人もきっと喜んでいると思います」と語るK子さんだった。

群馬県の主婦F子さん(62)の場合は劇的。昨年10月のこと。その日は亡くなった夫の誕生日だったが、夫が20年前に海外で買った古い腕時計を部屋で発見。ベルトが壊れていたため修理を思い立ち、すぐに時計屋へ。その帰り道。隣の店で売っていたハロウィンジャンボミニ(第729回全国自治宝くじ)を連番で10枚購入。

帰宅するや、宝くじ券を仏壇に供えて「当たりますように」とお願いした。抽せん日ののち、宝くじ券を売り場で調べてもらったら、なんと1等と前後賞合わせて5,000万円に当せんしていたのだ。「これは夫が導いてくれた当せんだと強く感じました」と涙ながらに喜ぶF子さんだった。



ご当地クーちゃん

もみじ饅頭クーちゃん